もの多し、その中には麻疹の後、食養生懈りて再感せるもありしとか、又鶴亂の類もありと聞り、麻疹鳥獸にも迫して、牛馬鷄犬の斃たるもあり、錢湯風呂屋箆頭舗更に客なし、花街の娼妓各煩ひて、來客を迎へざる家多かりし、七月九日十日淺草寺千日詣參る人少く、十六日閻魔參又同じ、少年の走百病これなきが故なり、兩國橋畔の夜舗、七月半は更に燈燭を點ずる事なく、納涼避暑の輩かつてなし、相州大山に登るもの又稀にして、道中より煩ひて歸りたるもありけり、八月の半より町々木戸に齋竹を立、軒に奉燈の挑灯を釣り、鎮守神輿獅子頭をわたし、神樂所をえつらへて神をいさめ、この禍を攘ふといへり、後には次第に長じて、大なる車樂を曳渡し、伎踊邃物を催して街頭をわたす、此風俗一般になり、又諸所の神社にも臨時の祭執行せしもこれあり、

〔麻疹流行記〕ことし文久二年壬戌、夏のはじめより、京都、大坂、麻疹流行せしが、漸尾張に傳播し、六月七月に至て、病勢熾に、府下病ざる者少し、今年の麻疹、熱病疫癘のごとく、輕き者も病苦は甚しといふ、江戸其外諸國一般に傳播して、皆同じ症也とぞ、八月末に至て、漸く歇む、夏秋の際前後、きく所を雜記する事右のごとし、

六月の末より七月に至て、家々の病人夥しく、醫者は晝夜を分たず、四方に奔走し（はやる醫者は夜中眠るひまなしと云）藥舗に藥を買ふ者、晝夜店に滿つ、扉角（テリアカ、葛根湯の藥劑等、おびたゞしく賣れたりといふ）官より熱田の祠人に囑して、神前に祈禱を行ひ、府下の市人に、神符を頒ち賜ひ、各街に祭らしめらる、各街七日の間神湯を獻じ、夜は篝火を燒き、燈を張り、竹枝に燈をかけて、軒にたて、夜景爛々として、遠望星のごとし、然れども病者多きゆへ、この美觀を出て觀る者なしと云、

小兒はすべて輕し、十六七歳より三十歳前後の者、病苦殊に甚しく、死亡の者も多し、四十已上は又甚輕し、病ざる者も間あり、然れども大老の者に病む者もたま〳〵ありと云、

婦人懷妊中にて麻疹にかゝりたるは、多くは重症なり、子は多くは流產す、死亡の者も多し、或は